



IBM OSAKA AGILE OFFICE

1-1. 社会とともに80年

日本IBMは2017年6月17日に創立80周年を迎えることができました。社是である「THINK」(考えよ)の文字を掲げた小さな事務所を1937年に横浜の山下町に開いてから、私たちはお客様とともにテクノロジーの力で新たな地平を拓き、変革を実現する取り組みを重ねてまいりました。「データ」「クラウド」「AI」と、これからのビジネスや社会に大きな影響を与える波が押し寄せている今、こうした変化を皆様の飛躍のチャンスとすべく、これからも日本社会とともに歩み、その進歩と発展に尽力してまいります。

1-2. オフィス移転の背景

旧IBM大阪事業所は1974年に芦原建築設計研究所によって設計され44年が経過する自社施設でしたが、施設の老朽化の影響だけでなく時代に即した設備対応などにも限界があり、移転を計画することになりました。移転先は中之島フェスティバルタワーウエスト。2017年3月に竣工された新築の高層オフィスビルであり、より大阪中心部に近い立地条件と高い耐震性、設備スペックなどを総合的に判断して移転先を決定しました。



旧IBM大阪事業所



IBM大阪事業所
(移転先)

1-3. Agile Officeコンセプト

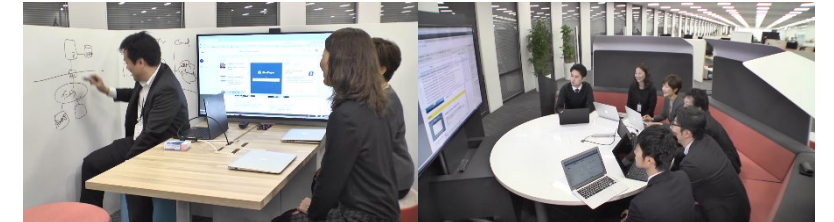
IBMでは“Client first”とともに“Agile”を標榜としています。“Agile”とは抽象的な概念で“機敏な”、“素早い”という意味です。IT開発手法の“Agile 開発と合わせて、IBM Agile Officeのコンセプトを以下のように表現しています。

- ▷ Focus on Collaboration
 - ・・・ コラボレーションにフォーカスする
- ▷ Creation rapidly responding and vibrant workplace
 - ・・・ 迅速な対応や活気溢れた執務空間の構築
- ▷ Responding to Diverse Work Styles
 - ・・・ 多彩なワークスタイルへの対応

1-4. 大阪Agile Officeの構築

このプロジェクトの実施にあたっては、今後の日本IBMの施設環境をより快適により時代に即した環境に対応させることを目的としました。中でもIBMが推進しているAgile Officeの構築を具現化すべくさまざまな検討を進めました。施設デザインやWorkstyle変革についてのコンセプトだけでなく、IBMのテクノロジーを取り入れたプロジェクトとなり、IBMで最も先進的なオフィスを実現しました。

Agile Officeのコンセプトは社内でも新しい考え方で、IBM社員がそれぞれの力を発揮し、お客様に価値を届けられるよう考えられたオフィスの形です。社員はコミュニケーションやコラボレーションを重視し目的や状況に合わせて働く環境を選択することができます。



その日の気分や状況に合わせて働く場所を選べるオフィスです。

1-5. 西日本地区の拠点としての機能

大阪事業所は西日本地区(中部・関西～九州・沖縄地区)の拠点としてお客様向けのClient Experience Centerの機能を持たせて営業支援を行うものです。Client Experience Centerは、最新のクラウド/AIをお客様に体感していただくと同時にそれらを用いた変革をIBMと共に議論し具現化していく場です。最新のソリューションや、100年以上にわたるIBMの歴史などを、映像やデモ、IBMスタッフとのディスカッションを通じて紹介いたします。

また、各事業所との物理的な隔たりを克服し、支障なく業務を継続するための仕組みを導入するなど、お客様のビジネスの成功に向かって取り組める環境づくりを行っています。

Watsonの技術をお客様に体感していただける、IT/ICTツールを活用したファシリティ・マネジメント

※ IBM Watson(ワトソン)は、自然言語処理と機械学習を使用して、大量の非構造化データから洞察を明らかにするテクノロジー・プラットフォームです。

2-1. オフィス機能を支えるIT/ICTツール

2-1-1. 家具案内アプリ「OSA FFGuide」※

■様々な働き方を促進する家具案内アプリケーション。

IBM大阪事業所は様々な働き方の受け皿となる多くの種類の家具があります。それらの利用方法を家具案内アプリ「OSA FFGuide」を使っていつでも簡単に参照できます。

家具の一覧や詳細を参照したり、フロアマップを表示することができます。オフィス内には電波を発する機器が設置されており、アプリケーション側で利用者の位置を検知してそのエリア、家具の案内を端末に通知します。また、カメラを家具にかざすことで家具を形や色から対象の家具を判別しその家具の情報を表示します。画像認識にはIBM Watsonの画像認識機能である、Visual Recognitionを使用しております。

※FF はFurniture & Fixtureの略



※このアプリケーションはIBM App Storeからダウンロードできます。
OSのLanguageに対応(英語・日本語)

2-1-2. 混雑状況モニタリングシステム (Usage monitoring system)

■フリーアドレスを最適化した、混雑表示システム。

スマートフォン・PC・フロア入口のディスプレイから、大阪事業所のフリーアドレスエリアの混み具合(在席率)を確認し、利用者が人が少ないフロアを選べます。

大阪事業所の出入口にセンサーを設置し、入退室の人数をカウントしています。

入退室の人数は、入室と退室人数をカウントし各フロアに在籍している入居者人数を把握しています。

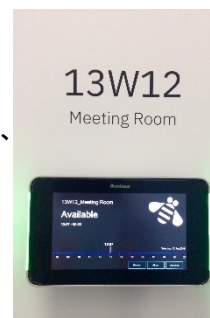
利用者は、フロア入口のディスプレイやWEBブラウザを使用して、各フロアの混雑度合を確認します。



(左)スマートフォン、(右)ディスプレイ

2-1-3. 会議室予約システム

各フロアに数十以上ある会議室など予約システムが採用されています。予定時間を超えても使用されない場合は、自動的に予約がキャンセルされ、次の利用者が使えるようにしています。予約状況は部屋前のモニターで確認でき、空きがある場合はその場で利用設定が可能で、会議室等の稼働率を上げています。



2-2. IBMのソリューションを体感

2-2-1. AIディスプレイ「NOW」※

受付ロビーではIBM Watsonの技術をお客様に気軽に体感していただける仕組みとして、IBMの動画の放映方法にWatsonの技術を使っています。リアルタイムのテレビ字幕情報とSNSの弦きを掛け合わせる方法と、タブレット端末を使用した顔認識によってその方に合わせた動画を映し出す方法の2通りがあります。

※ NOW はnews on tv & online worldの略



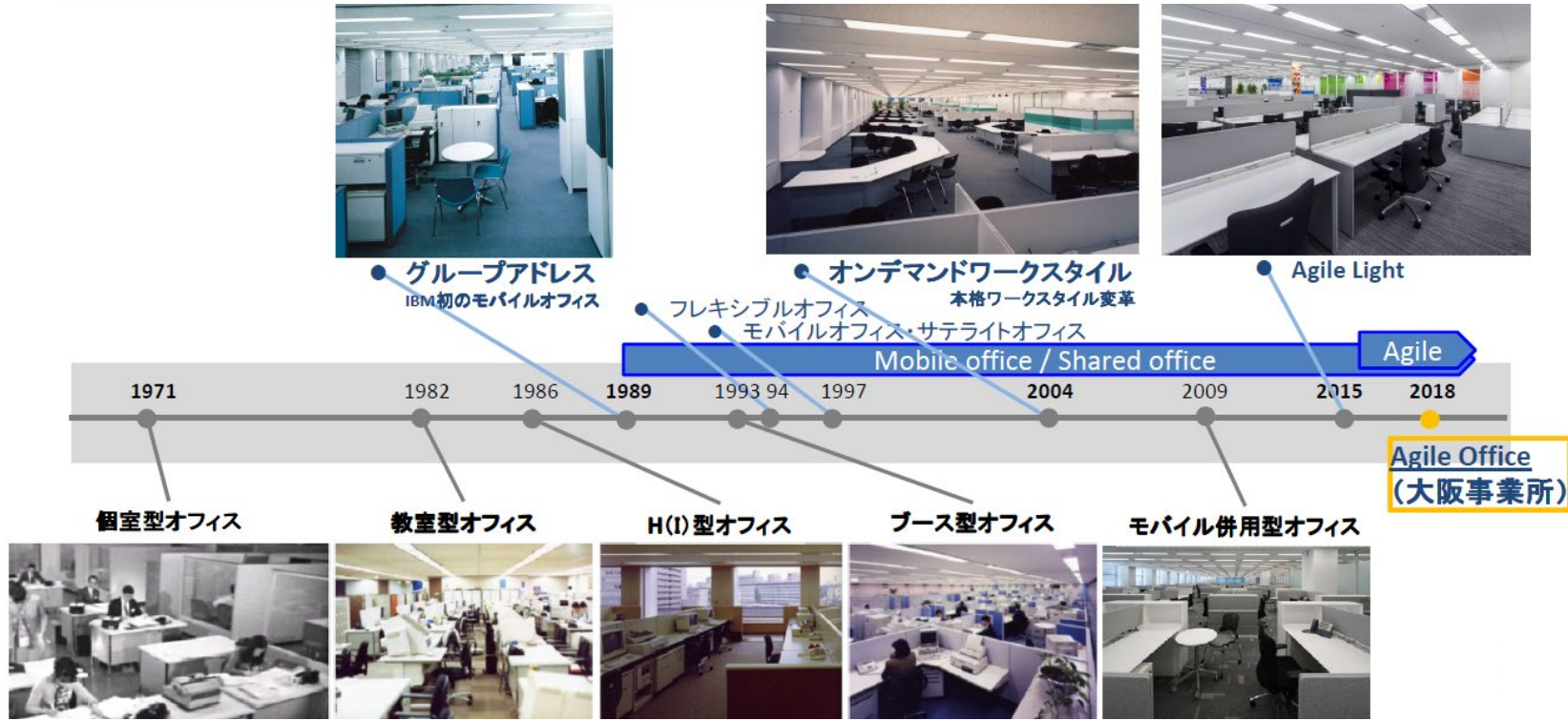
2-2-2. 360° カメラを使ったモニタリングシステム

Clients Experience Centerの3方向をディスプレイに囲まれたスペースでは、Watsonを使って空間内にいる人をモニタリング分析するデモが体験できます。部屋の中心に置かれた360度カメラを使って、写った人の性別や年齢を分析。どこにどれぐらいの人が滞留したかを色によって表示しています。



オフィス戦略に基づいたファシリティ・マネジメントの実践

3. 日本IBMの進化するオフィス戦略



4-1. 省エネを促進するビル設備の利用

〈人感センサー制御等による省エネ〉

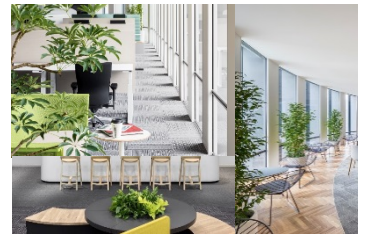
- ・執務フロアはビル標準設備で準備している明るさセンサーによる調光を採用。標準設定が750Lxであるところを、500Lxに設定し、省エネを図っています。
- ・照明は全てLEDです。
- ・執務室や廊下には、照明用人感センサーを設置しました。
- ・空調用人感センサーによる省エネ制御を行っています。
- ・不在エリアの照明を自動に点滅させることにより更なる省エネを図っています。更にタイマーにより夜間の消し忘れ防止を行っています。



照明明ろさセンサー 空調用人感センサー

4-2. 植物の積極的活用

みどりの恩恵を受けながらはたらくということは環境への負荷低減だけでなく自分たちも心地よい環境づくりへつながります。



4-3. 空間の効率化により総面積約40%超の削減を達成

旧大阪事業所から現事務所へ移転する際に面積の効率化を図ることで大幅に事務所面積を減らすことに成功しました。それにより、大幅な省エネにつながり、より地球環境に配慮したオフィスを実現しています。

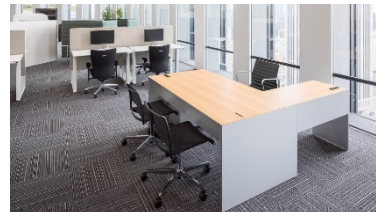
〈施策1. フリーアドレスの推進〉

日中外出の多い社員はすべて固定席を与えず、かつ、共有席(フリーアドレス席)は複数のフロアにまたがっているため、席を最小限まで削減することができました。これにより全従業員数の約半数の席数で運営が可能になりました。



〈施策2. オープンな 役員席〉

従業員と役員とのコミュニケーションと面積効率化という観点から役員室を撤廃し、オープンエリアに役員席を配置しました。



〈施策3. 会議室の削減とコラボレーションエリアの充実〉

“Agile”という概念からも会議室で打ち合わせを行うのではなく、気分や状況に合わせて場所を瞬時に選択し、本会議に参加していない従業員も含め従業員同士のコラボレーションを図ることが重要だと考え、大幅に会議室を減らし、その分オープンなコラボレーションエリアを充実させました。壁で閉ざされたクローズドなエリアを減らすことができ、視覚的な広がりを与え、旧事務所より開放感を感じるオフィス空間を実現しました。

Usage monitoring systemや会議室予約システムなどのIT/ICTの技術も空間と併用することで、より高い空間の効率化を実現しました。

